

第23回Kozoomサロン テーマ「旅で出会った怖いこと」について

清水健二

今年4月24日に起きた北海道の知床遊覧船の転覆で、乗組員2人と乗客24人が犠牲になった。死亡12人と現在行方不明14人は未だ発見されていない。現場は風と高波で船は沈没し約120mの海底から発見されているが、引き上げに時間がかかり困難という。犠牲者の捜索と事故原因の解明に手間取っているようである。この痛ましい事故に因んで、過去に経験した話を披露することが今回のテーマになっている。そこで私なりに思い出すことを綴ってみたい。

今年多くの友人は米寿を迎えるが、私もここまで生きて来ると、命拾いした出来事の多さに驚く。特に太平洋戦争での空襲の怖さや、戦後の飢えに苦しんだ思い出など尽きないが、今回は旅で出会った話に限定して記してみたい。

9年前、2013年3月2日～5日の、3泊4日で知床へ旅行した時のことである。写真クラブの仲間12人で、オーツク海から知床に広がる流氷を撮影する目的で出かけた。伊丹から羽田、羽田から中標津(なかしべつ)空港へ飛んだ。午後2時頃に到着し、チャーターしていたマイクロバスで羅臼に向かった。



根室海峡に沿って国道335号線を北上し、途中夕景を撮影したが強い寒風が吹き始めたため、早々に切り上げ、目的地に向かった。みるみるうちに吹雪になり日が暮れて、山間地にさしかかった頃は、前方が見えないほどの降雪と車道は積雪に埋まってしまった。引き返すこともできず、温暖育ちの関西人にとって、経験したことも無い凄まじい風雪に、我々一行は対応するすべもなく運転手の判断に従うしかなかった。何処が路肩なのかも判らなくなって、徐行している車が横滑りし始めた。運転手に停止して様子を見ようと提案したら、運転手は、「停止はできません。車が埋まってしまい動きがとれなくなります。少しでも車を動かすことが大事で、車の滑るのをくい止めるよう運転しますから私に任せてください。この道は慣れていますし、路肩もよく知っています。」ときっぱり言われ、乗客に不安を抱かせない強がりのようにも聞こえた。しかし返す言葉も無く、運転手に頼るしか方法はなかった。その後誰一人、ものを言う事無く目をつむり町に無事到着すること

を祈ったものである。

夜遅くやっと羅臼の宿に到着し、こと無しに終わったが、その夜この地域に発生した遭難事件を翌日、テレビで知り、更に新聞記事で詳細を知って、マイクロバスの運転手の行動で九死を得たことに胸を撫で下ろしたものである。

我々の通った中標津町の道路で母親と娘2人と1人の息子の4人が、車を止めていたため雪で埋まり、窓やマフラーが塞がって排ガスが車内に充満しCO中毒死したという。また近くの湧別町では父親と娘2人が自宅近くで車から降り、降雪の激しさで道を誤り、寒さのために父親は凍死したが、娘たちを自分の体で覆いかばって死は免れたと言う、悲しくも親子愛の悲劇を知った。他にも惨事があり報道されていた。実に恐ろしい雪の怖さを体験したものである。

宿舎に吹き付ける暴風の音と雪は一晩中続いた。朝方やや小康状態になったので、近くの漁港へ向かい厳しい自然の驚異を写真に撮りたいという仲間たちの意見で、無謀にも地吹雪の舞う海岸に出かけ、始めてみる荒れ狂う風景を前に懸命にシャッターを切ったものである。



地吹雪の中で
撮影



氷に閉ざされた漁船



流氷ハイクする人たち



蝦夷シカを追いかけて

屋前になると今までの風景は嘘のように変わり、青空が見えだし知床半島を横断しオホーツク海

へ出た。予定のコースを斜里町から網走町へと海岸線沿いに広がる流氷の風景や雪原を駆ける蝦夷シカ、北キツネなど、北海道ならではの事物に好奇の目を注ぎながら撮影した。

私達の同期生 中西峰根子(旧姓 岡)さんが、不慮の交通事故で2005年8月に亡くなったが、生前彼女が私にオホーツク海の流氷を観に行ってきたと便りをくれた。その時詠んだ俳句ですと添えてくれた一句は、「流氷を 人は無口に 眺めおり」だった。その光景を目当たりにして、彼女を偲んだものである。

網走から南下して女満別(めまんべつ)空港から3泊4日の旅を終え全員無事に帰阪した。撮影できた多くの写真は後日、写真展に出品して好評を得たが、思えば過去から現代に至る写真家たちが、未踏の地や未知の世界を写真にした作品を鑑賞し、感動を与えられた数々の場面は、命がけの成果品だったのかと改めて認識する事になった。

「人生は旅」というが、旅することは何時もリスクと背中合わせだと思う。生きていく限り常に死と直面し、上手く回避できた人は長生きしているように思えてならない。中西さんは、知床まで流氷を観に旅行しても事故に会うこともなかったのに、大阪の居住地で、車に跳ねられ運悪く他界するというその時の運不運に支配されてしまうのも、まさに人生は一寸先は見えない無情と言うべきだろう。

私たち写真クラブのパーティ12名が、バスの運転手の判断で事故に到らなかった事に対し、知床観光船では船長の出港の判断が乗客を死に到らしめる事になった。世間から船長の無謀さや、観光会社の社長は非難される結果となった。同じ旅行での出来事も、プロと言われる人に生死を決められてしまう怖さもあるが、我々のパーティが前日恐ろしい風雪に会いながら、翌朝まだ危険状態を認識しながら懲りもせず、折角ここまで来たからにはと出かける各人の無謀さも問題があるといえよう。何事も怯んでばかりでは人生は面白く無い。時には多少の危険を伴っても冒険心が新しい人生を構築する事になるものだと思う。冒険家は危険を承知で挑み、成功すれば英雄視され、失敗すれば阿呆呼ばわりする人間が最近多くなり過ぎているように思えてならない。

現在太平洋を小型ヨットで単独無寄港で横断中の堀江謙一氏(83歳)の行動も無謀といえば無謀だが、それをとやかく言うのではなく、海洋冒険家としての氏なりの人生があることを尊重すべきだと思う。人生には正解などあるわけでない。リスク対策はやらねばならないが、後は運を天に任せて挑戦し突き進むのも、その人の生き甲斐に繋がるものだと私は考えている。